

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3370500328	
法人名	医療法人社団きのこ会	
事業所名	グループホームあんきな家	
所在地	岡山県笠岡市新賀美之越3220番地	
自己評価作成日	平成26年3月20日	評価結果市町村受理日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/33/index.php?action_kouhyou_detail_2013_022_kani=true&JigyosyoCd=3370500328-008&PrefCd=33&VersionCd
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ライフサポート
所在地	岡山県岡山市北区南方2丁目13-1 県総合福祉・ボランティア・NPO会館
訪問調査日	平成26年3月31日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>・介護保険法の理念に基づき、家庭的な環境の中で利用者が健康で明るく安心した生活を営み、その有する能力に応じた生活を送れるよう適切サービスを提供する。</p> <p>・要介護者、介護者という関係でなく、共に生活する「家族」とした関係を大切にしている。入居者、スタッフ一人ひとりが自分の意見を出せる環境にしていく。</p> <p>・庭の畑や花壇をスタッフと入居者の皆様と協力し、作る、育てる、食べるを皆で共有していきたい。</p> <p>・近隣グループホームと協力し、納涼祭の行事などを開催したり、災害時に備え、合同での防災訓練を行い、お互いに支えあっている。</p>

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>このあんきな家を開設して以来、「お母さんも居てくれる家族の様なホーム」を目指し支えてきた職員が入れ替わって、今度は「息子や娘そして孫」達が和やかで気楽な日常を支援している。ここで4年共に過ごした後、今は全体を見渡す役割を担っている管理者は「立場の違いに戸惑いながら、この一年夢中で過ごしてきた」と言う。あまり歳の違わない若い者同士、心一つにして「家族とのつながり」と「個別ケアのレベルアップ」を目標に心機一転の二年目を迎えようとしている。先駆者としての認知症専門病院の膝元で、きのこグループの各施設の協力も得ながら、その一員として大きな役割を果たしているため、利用者・家族も安心して日々過ごせるだろう。これから利用者の認知症や身体の不調が進んでも、地域の一員であるチャンスや、非日常的な喜びを感じてもらえる場面を少しでも見つけたすチャレンジを予感させてくれる空気を感じた。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「より家庭的に」という理念を大切にスタッフ全員で意識し、地域サロンなどの参加につなげていく。	今年度の目標として「家族会のレベルアップ」と「個別ケアを具体化し職員間で共通の対応」をしようとして取り組んでいる。職員は利用者がホームで自由に生活できる環境作りや地域交流を視野に入れた実践に努めている。	理念の柱の一つである「個別ケアの充実」の為に家族との絆をさらに深めたいと管理者から聞いたが、地域とのつながりを広めると共に今の家族会等の実践を継続し、レベルアップして欲しい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	民家との距離があるため同グループ内の施設との交流が主となるが、祭りに顔をださせてもらったり、地域のスーパーと連携して食材の提供をお願いしている。	地域住民からのお誘いもあり、地域の「棕の木サロン」へ年2回参加している。4GH合同の納涼祭は当日雨の為に中止となったが、後日花火大会を催し、他ホームの利用者と共に楽しんだ。職場体験の中学生と一緒に、花壇に花を植える等の交流もある。	ホームが民家と距離があるという問題は否めないが、地域の方々の中でボランティアや応援者としてホームと関わりを持っていただく等、前進の余地があるのではないかと思う。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	呼びかけはしているが、見学程度の段階で、地域包括支援センターとの協力して地域の窓口になっていきたい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	近隣のグループホームと共同で開催し、それぞれのよいところを引き出したり、民政委員の方の意見を参考にさせていただいている。	市の担当者、民生委員、家族等の参加があり、4GH合同で2ヶ月に1回開催し、活動報告・情報交換等の意見交換をしている。4GH合同のイベントや災害避難訓練などを企画して連携、協力体制を図っている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議の参加や、地域包括支援センター主催の地域密着連絡会議に参加している。	運営推進会議へは市の担当者の出席があり、情報提供やアドバイスを受けている。介護保険に関する相談やその他、必要に応じて担当者と連絡を取り合い、日頃から良好な協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束は禁止している。スタッフ全員共通の理解で関わっていく。	法人の方針もあり身体拘束は一切していない。外に出たい人には本人の気持ちを第一に考え、職員が寄り添い、話をしたり近くを散歩したりしながら気分転換を図れる様な支援をしている。職員間で身体拘束についての周知徹底を図っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	「自分の家族」ということを頭にいつもおいて利用者と接する様、スタッフが共有している。入浴時当利用し、身体状況の把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	まだ活用にまで至ってない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居の際、書面をもって説明している。契約内容変更のさいは、随時お伝えしていく。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会や、面会時を利用して意見をお願いしている状態である。外部評価時のアンケートの結果を参考にさせていただく。	年2回、行事や年末の掃除会を兼ねて家族会を開催し、約半数の家族の参加がある。玄関に「希望の箱」を設置し広く声を聞いている。面会時や必要に応じて電話で状況報告をしているが、家族の個別の相談や意見等の対応記録を職員間で共有し、運営にも反映させている。	現在の目標として発展的な「家族会」の有り方が掲げられているが、より早い段階での計画や家族の状況調査等、事前の準備や「家族会」のねらいの確認等が成功の鍵となるかもしれない。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフ間ではケアだけでなく、日常生活でも自由な意見が出せるよう関係づくりを心がけている。	1週間に1回スタッフ会議を開催し、カンファレンスをしている。職員全員が世代の近い職員同士、その点でも日頃から何でも話しやすい。日々の申し送り時や連絡帳を活用しながら、職員間の情報の共有を図っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者とは、電話でいつでも連絡がとれる状況があり、時には助言をいただいたり、話しやすい関係性を作ってくださっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修の機会もあり、市内の病院での講演の参加や、栄養士の講演の参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループ内でのグループホームの連絡会議を2か月に1回持つようにし、問題を持ち寄り、知恵を出し合い、質の向上を目指している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の現状を把握し、また、今までの生活してきたことを大切にし、本人の安心できる環境作りにつなげていく。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居時、家族の要望を聞き、面会時なども随時伺っていくようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービスを実施していくなかで、今後の支援等を予測し、必要な支援をスタッフ間で話し合い、見極めしていく。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護者と要介護者の関係でなく、共に生活する「家族」のような関係であるという考え方で過ごしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人と家族をつなげるために、家族会などの行事をとおしてふれあっていただく。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族や知人はもちろん、以前働いていたスタッフや、その子どもさんなどもきてもらいふれうことで、いい刺激になっていると思われる。	家族の協力を得て、法人施設に入所している夫に会いに行っている人や娘さんと馴染みの美容院へ行く人もいる。ホームの元職員や関連施設の利用者・職員が馴染みの関係となっており、受診や散歩で出会う機会には、関係が途切れないように支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者個人個人の状態を把握し、スタッフ間で話し合い、孤立することを防ぎ、居心地のよい環境に皆がなれるよう考えていく。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他の施設へ行かれた方も、法人内での移動もあるので、会いにいけるよう心がけている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	思いや希望を把握するよう心がけている。コミュニケーションのとりにくい方でも、普段の関わりから読み取るようにしている。	意思表示できる人が多く、思いや希望も比較的把握しやすい。言葉は少なくとも行動で示す人も多く、職員は個々の日常的行動の中から、心の内にある思いを汲み取るように努めている。	あんきでのんき、それでいて活気ある家庭的なホームを目指していると思うが、利用者それぞれの思いや意向にもっと積極的に耳を傾け、日常的な暮らしの中でワクワクドキドキの「非日常」を一つでも増やしていきたい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族からの聞き取りだけでなく、本人の昔話から聞いたことや、これまでのサービス機関の情報等も大切に、スタッフ間で共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活記録を残し、スタッフ間で話し、確認しあっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の生活歴や、趣味等を把握し、本人、家族の要望、ドクターの意見を取り入れ、現状に即したものにしている。	利用者の担当制を敷き、日常生活記録に記入した“気づき・発言・会話”等を基に職員間で話し合っている。アセスメント(生活自立度目安表)を6ヶ月毎に見直し、本人・家族の意向や要望を基に、状態の変化に流動したプランを作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録を残し、スタッフで情報の共有に役立てている。週に1回話し合いの機会を持ち、ケアの改善に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	「個人」を大切に、その人に必要なサービス、また今後予期される状況を推測し、その人に合ったサービスをスタッフ全員で見つけ出し提供している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	周辺施設や、敷地が大きな資源となっているので、個人の趣味とADLを考慮にいれ、豊かな暮らしが出来る様考えている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	事業所内の病院に月1度受診し、先生の意見をいただいている。また、急変などでも当直医に連絡できる。専門外の治療は、専門医に受診お願いしている。	全員、法人内の病院を受診しており、緊急時には往診の対応もある。家族はとても協力的であり、他科受診は原則、家族に付き添いをお願いしている。時と場合によっては職員も受診同行することもある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	グループホームに看護師はいないので、小さな気づきも、事業所内の看護師と情報を密にするよう心がけている。また、健康診断等もおこなっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院関係者の方に、退院後のケアの状況報告したり、病院から、グループホーム帰居後の食事支援の方法など指導いただき参考にさせてもらった。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	個人の重度化をスタッフ会議で話し合い、末期のあり方を家族と相談し、あんな家で無理なことは正直に話し、代替となる施設をけんとうしてもらう。	法人の方針として看取りはしていない。契約時に重度化や終末期のあり方については説明している。出来る限りここでの暮らしを支援しているが、医療的な問題や入浴が不可能となった場合は入院や特養への移行を検討している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変を想定したマニュアル作成し、初期対応のイメージを作っておく。事業所内の病院の当直医、看護師に、協力要請する。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防火管理者を中心に、避難訓練を年2回行い、地域の消防署と連携を取れる体制を整えている。また、事業所内の協力も得られる体制にある。	今年初めて4GH合同の避難訓練を実施した。外の非常階段を使い、歩行が可能な人は職員と一緒に避難経路の確認をした。隣のホームとは電話で何時でも連携できる体制が整っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	「個人」を尊重し、本人の意見や、主張を大切にした上で、声かけ、行動を起こすようにしている。	軽度の人の中には他人の世話を焼きたがる人もいる。職員は、される側の人格やプライバシーへの配慮、する側の人格も尊重し、好意を無駄にしない断り方や言葉にも工夫している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	言葉だけでなく、表情や行動から読み取り、その本人の意思を尊重していく。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個人のペースに合わせて過ごしていただいている。気分や体調に合わせて、自室やホールを自由に行き来して過ごしてもらう。1階・2階も自由に行き来してもらう。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	希望される方は家族の協力で美容院にいらったり、マニキュアをして喜ばれる方もいる。服やスリッパなど本人に合うものを選ぶよう家族と協力している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	買い物の好きな人、調理準備をする人、盛り付けの上手な人、後片付けの得意な人とそれぞれに合ったことをやりながら楽しく過ごすようにしている。	1階4人、2階5人に分かれて職員と一緒に食事をしている。1・2階のキッチンで職員が分担して作っている。ヤクルトの訪問販売があり、各自が選んで買う楽しみもある。テーブル拭き、後片付け等、出来る人には手伝ってもらっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量は毎食記録し、スタッフ間で共有している。量も多少個人差をつけ、水分補給も2回を基準に必要なら随時補給してもらう。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自室の洗面台を利用して、口腔ケアの援助をしている。義歯の消毒は週2回ポリデントをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自室に個々のトイレがあるので、本人の行きたいときに使用することができる。必要な方は排泄記録を残し、状況に応じてトイレ誘導している。	各居室にトイレがありプライバシーも守られている。自立している人もいるが、介助が必要な人には個々の排泄リズムを把握し、さり気ない声かけ・誘導をしている。男性利用者も基本は座位での排泄を支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	日々の記録や、本人への聞き取りで排便チェックをしている。その方に応じた飲食の工夫、散歩等で便秘予防に努めている。必要な方は下剤にて対応する。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は午後の時間を利用し、本人のペースで入ってもらっている。午前の方が落ち着いて入られることが多い方は対応して午前中入浴してもらっている。	週2～3回、午後入浴を基本としているが、午前中に入浴する人もいる。車椅子の人で2人介助での対応は1名。入浴拒否の人には時間や日を変えて入ってもらう等、工夫しているが無理強いはしない。殆どの人はお風呂好きの人が多く。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自室で休むだけでなく、リビングにもソファを設け、ゆったり出来るような環境作りを心がけている。夜の入眠時間もその方の生活習慣に合わせている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書をよく読み、その後の症状の変化に気をつけ、何かあれば医師に相談する。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事を中心にその方が得意なことに取り組んでもらっている。時間があれば歌会をひらいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	毎日は周辺の散歩を支援している。また、買い物を利用しドライブしたり、家族の方と外出されるかたもいらっしゃる。	日常的に周辺の散歩にはよく出かけている。職員と買い物に行ったり、自宅へ外出・外泊する人もいる。全員揃っての外出は今のところ難しいが、希望者とドライブを兼ねて季節の花を見に行く事もあり、職員はその人に合わせた個別の外出支援をしている。	法人の敷地内の散歩は毎日のように楽しんでいるが、散歩の途中でちょっと休めるベンチがあれば嬉しい。また、季節を楽しむ外出や外食も少しずつ増やしていきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人は現金は持たれていない。家族と協力し必要なものを購入していく。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望により支援する。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	1階と2階に共同の場所があり、それを包むように個室が配置され、ホールを使いやすく、皆で利用する。危険なものは目のつかないように心がけている。	1・2階にリビングとキッチンがあり、好きな場所で自由に寛げ、利用者はエレベーターと階段を使って移動している。ソファーに座ってテレビを見ている人、自分の座る椅子が決まっている人、それぞれの自由をお互いに認め合いながら、思い思いに過ごしていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	1階と2階に共同空間があることにより、片方過ごしにくければもう片方といった使い分けをしていただくことができる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の写真、仏壇家具等をその人、家族の希望で配置、飾っている。中には飾りを嫌がり、片付ける方もいらっしゃるので本人の希望に合わせている。	和室と洋室があるが2階の方が和室が多い。「散らかしているけど・・・」と言いながら見せてくれたAさんの部屋は家族の手作りの色紙のはり絵が沢山かけてある。収集癖のある人の場合は余計な物は置かず、職員が管理している。それぞれその人らしい居室になっていた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	必要な場所は手すりを設けたり、杖代わりに家具を配置して移動の安全を確保している。2階も階段とエレベーターを選んで使用できる。		